学業成績評価の調査報告
—2000年度後期共通科目担当教員対象—

佐藤洋一

1　はじめに

学業成績評価のあり方は、学生に何を獲得させるかという個々の授業の具体的な目標や学生の学習（学修）を含んだ授業総体を検討する中で、問われるべきである。したがって、「適正な成績評価」は教育の本質にかかわるカリキュラムの重要な要素である。

本学共通科目委員会は、共通科目の授業改善〔学生の学習（学修）力の向上・確立〕の一環として、2000年度に成績評価に係る現状を把握することとした。個々の担当教員を点検するためではなく、あくまで共通科目の各科目における成績評価にポイントをおいた授業改善を念頭に、各々の担当教員のみならず各担当「グループ」に参考資料あるいは検討資料として提示することを目的としたものである。

2　実施及び回収状況等について

具体的な調査項目については、資料として付した調査票「共通科目の成績評価に係る調査」を参照されたい（付録３）。

調査対象は2000年度後期共通科目の全担当教員156名、調査実施期間は2001年１月31日～３月12日である。調査票の回収は83名分、回収率53％（前期65％）、その科目別の内訳数は「日本国憲法」３、「人文科学入門」４、「社会科学入門」３、「自然科学入門」２、「平和と人権」１、「環境と人間」１、「こころとからだ」３、「現代日本の社会と文化」１、「国際社会と日本」９、「科学・技術と社会」１、「人間と生活」３、「情報教育入門Ⅱ」14、「英語」９、「英語コミュニケーション」14、「ドイツ語」１、「フランス語」４、「中国語」３、「スポーツ科目」７である。

以下において、設問に対する回答率は全回収数83を母数とする。各科目の回答率は各々の内訳数を母数としているが、母数が少ないので意見分布が科目の性格を強く反映していると必ずしもいえないことに注意されたい。

3　調査結果のまとめ

3.1　授業で設定した到達目標と成績評価について（設問２及び設問６－２）

授業で設定した（１）「到達目標（あるいは重視事項）」、実際の（２）「到達度」、実施した（３）「評価方法」と（４）「評価基準（点数化又はA・B・C及び特にDにおける評価ポイント）」、さらに「受講生に示した評価の方法と基準の具体的な内容（設問６－２）」の記述回答全文をまとめて、付録２に収めた。

学生の学業成果や学習（学修）活動を多面的に評価する具体的な創意工夫、ならびにその評価を通して逆にどのように授業内外での学生の学習力の向上を図っているかを窺うことができる。この貴重な資料が十分活用されることを切に望むもの

である。

3.2 成績評価の目的について（設問３）

成績評価を何のために行うかという担当教員の考えは、多い順番に「学生の学習（学修）成果を到達度で知らせるため」が69％（前期の場合68％。以下、前期の調査結果を括弧内に数値のみ記す）、「個々の授業は、大学教育全体のカリキュラムの目的・位置づけに従い、目標・内容・方法を持って行われ、成績評価で一つの授業の役割を完成させるため」が35（44）％、「自分の授業を評価し問題点等を把握するため」が20（25）％、「大学（愛知教育大学）としての教育の「質」を維持・向上させるため」が33（24）％、「学生の学習（学修）の援助をするため」が23（22）％である。

その他は２（６）％であるが、「目標達成の手段」（学生の学習意欲を刺激するため）、「学習の最終的成果の確認」（教員と受講生相互間）と、受講生が少ない場合は個別指導ができるので「不要である。有害である」という他に、主題科目に関わった次のような課題の記述が挙げられている。「複数担当に伴う評価問題」（３～4回の講義の結果で学生にレポートを求めても、質のいいものが出て来るはずがない、したがって評価は義務的に行った）、「感想を通しての評価」（現成績評価とは別の方法を採っている：毎回ミニレポートに感想を書いてもらいその内容で推測して行っている）。

また、評価を「義務的に行っている」が16（14）％、「評価は有害」０（２）％という選択の割合である。

担当教員を科目別でみると「自分の授業を評価し問題点等を把握するため」を多く選択しているのは、「平和と人権」100％、「こころとからだ」67％、「フランス語」50％である。なお、「こころとからだ」の担当教員は「学生の学習（学修）の援助をするため」67％を同時選択している。

3.3 受講生に対しての成績評価の方法と基準の説明について（設問４）

担当教員は学業成績評価の方法と基準を受講生にどの程度説明すべきと考えているのであろうか。受講生に可能な限り説明すべきであると考えている割合は58（63）％、その上さらに解答例や実施した評価ポイントを公開すべきとするのが12（16）％、合わせて70（79）％である。一方、説明する必要はないと考えている割合は６（５）％、授業を始めてみないと受講生の学習（学修）能力の水準が分からないので示し難いとするのは16（８）％である。

3.4 受講生に評価の方法と基準をどう示したかについて（設問５）

受講生に評価の方法と基準を授業目標に沿ってどう具体的に示したのであろうか。シラバスで具体的に示し授業中にも説明した割合が17（27）％、シラバスでは不十分なので授業中に具体的に示したというのが42（48）％、シラバスで具体的に示したので授業中に説明しなかったが10（11）％と、受講生に具体的に示したのは担当教員の69（86）％に及ぶ。シラバスでも授業中にも具体的には説明しなかった割合はほぼその残りの29（13）％である。

3.5 受講生に評価の方法と基準を示した時期について（設問６－１）

受講生に評価の方法と基準を示したのはどの時期であったろうか。学期の初め頃が圧倒的に多く37（87）％、学期の中頃が７（６）％、学期の終わり頃が７（15）％、定期試験の直前が13（15）％となっている。

3.6 成績評価の手段について（設問７）

単位の授与は授業科目を履修した者に対し試験の上で行うこととなっている（「愛知教育大学教育

学部教育課程に関する規程」)。ここで規定している試験とは、筆記試験、口述試験、報告書審査、作品及び実技審査である(「実施要項」)。最終的な学業成績の評価は、この試験の実施を含め、様々な観点をも取り入れてなされていると思われるので、複数選択が可能とした上で、評価手段(試験など)を質問した。筆記試験46(54)%、報告書審査42(35)%、作品及び実技審査16(19)%、口述試験11(3)%、という順番である。科目別にみると、「こころとからだ」、「英語」、「ドイツ語」、「中国語」では100%筆記試験であり(ただし、他の方法併用もある)、次いで「英語コミュニケーション」86%、「人文科学入門」67%となっている。報告書審査を100%としている科目は、「社会科学入門」、「平和と人権」、「国際社会と日本」及び「人間と生活」である。ただし、「環境と人間」と「科学・技術と人間」は筆記試験と報告書審査を100%併用している。

その他の選択割合は33(27)%であるが、その内容は①出席、②課題との取り組み(授業中)、③課題との取り組み(授業外)、及びこれら三者の組み合わせ(ただし、本来②は③を、③は②の要素を含んでいる)であることが記述から窺がえる。詳しい記述の概要は次の通りである。

○出席率(4)。○抜き打ちの出席をとった。○授業中の発言(2)。○授業中の作業の成果。○平常点(予告の上での小テスト)。○日頃の小レポート。○授業への参加の仕方+貢献度を評価した。○発表とそれに対する議論。○スポーツ科目のため実技試験。○授業態度及び出席状況(3)。○実技が主なので出席及び活動の様子。○筆記試験(学期末試験)と出席状況(授業目標の達成には必ず受講することが前提となるからであり、出席状況が良好な者が到達度も高いと思われるから(試験結果からも裏打ち))(2)。○出席+小テスト(課題作品)と小討論+期末レポート。○「授業中の質疑応答+レポート+出席回数。○毎時間、理解度を示すための記録・感想・疑問など提出させその内容を加味した。○授業中の活動と提出物+出席状況。○ワープロ+表計算の実技の授業内容のため提出物。○複数回のメールによるレポート提出。○ワープロ課題のフロッピー提出。○授業中に指名した時の態度+反応。○授業中での発言内容+出席状況+提出物。○平常点(出席と授業内での作業及び小テスト)。○毎回のLessonへの参加態度+発言+質問etc. ○平常点(出席状況+授業内での練習+課題発表)。

3.7 成績評価と出席との関係について(設問8)

前節の成績評価の手段のところで、すでにふれられているが、授業への出席と成績評価との関係を取りあげよう。本学の場合、10回(全授業回数の3分の2)以上の出席が定期試験の受験資格として定められている(「実施要項」)。成績評価に出席状況を加味した度合を尋ねた結果をみてみよう。担当教員のうち、少し加味したとする割合が31(43)%、かなり加味したが25(29)%、強く加味したが19(11)%である。合計76(83)%の担当教員は何らか加味しており、加味しなかったとする24(16)%を大きく上回っている。

3.8 成績評価の厳正さについて(設問9)

次に、成績評価の厳正さについてはどうであろうか。「成績評価は厳正に行い、ある基準に達しない者は不合格にすべきであると思いますか」という設問に対して、全くそう思わないと全面的に否定する意見は2(0)%、そうは思わないという否定の意見の割合は1(5)%である。逆に、強く思うと強く肯定する意見は13(14)%、そう思うは72(63)%、合わせて86(77)%の担当教員が、成績の厳正さを求めている。どちらともいえないという中間的意見は11(16)%である。

3.9 成績評価の方法について（設問10）

試験成績の評価は、A、B、C及びDの評語により判定し、100点満点の場合、Aは85以上、Bは70－85、Cは60－70、Dは60未満（不合格）と定められている(「実施要項」)。

さて、この成績評価〔ABCD（又は点数化)〕はどのような方法で行われているのであろうか。用意した選択肢のうち、「最低限の目標を設定し、そこまで到達した者を合格とし、その到達度によりA・B・Cを決める（絶対評価）」が87（76）％、「最低限の目標を設定し、そこまで到達した者を合格とし、合格者を一定の割合でA・B・Cに割り振る（絶対評価と相対評価の組み合わせ)」が11（16）％という選択割合になっている。その他（2（5）％）は、「到達目標をやや下回った学生に対して、出席の度合・授業中の発表や取り組みの意欲等を考慮し可能な限りポイント化し加味して最終評価」や「目標を設定し、さらに日常の努力状況を参考にした」といった内容で、受講生の日常的学修をポイント化して最終評価に組み入れる方法が示されている。

3.10 形成評価について（設問11、12）

「実施要項」でも定期試験以外に臨時試験の言及があり、当然ながら授業期間の途中での評価を想定している。受講生が授業に積極的に参加する中で学修が形成され、試験自体も有力な形成手段という大切な側面を持っている。「学期の途中で、臨時試験・課題（報告書の提出など）を課し、学生の学習（学修）の進捗状況を評価（形成評価）しながら授業を行った」が49（52）％、一方「行わなかった」が47（48）％とあい半ばする結果である。途中評価の実施率100％の科目は、「平和と人権」、「科学・技術と人間」、「ドイツ語」及び「中国語」である。

さらに「成績評価に係る試験（筆記試験、口述試験、報告書審査、作品及び実技審査）を採点し（コメント・添削も含む)、受講生に返却（通知)」を行ったが22（17）％、さらに、「試験の解答例を公開した、又は実施した評価ポイントを公開」を行ったが7（8）％、合わせて30（25）％の担当教員が積極的に対応していることを示している。「中国語」の担当教員全員がどちらかを実施している。なお、返却(通知)は行わなかったが、試験の解答例を公開した、又は実施した評価ポイントを公開したという割合は6（8）％である。

設問12の記述内容は、以下に示すように採点結果の返却に関するコメントである。授業の最終回が試験であるため、学生に返却しようにもそのチャンスがないという指摘が多い。

○本来は、試験の解答例やコメントなどを学生に伝えるのは当然だと思うが、現行のシステムではそれができない。何らかの手段・方法を講じて欲しい。○日本国憲法は全学必修であり、受講生の数が膨大なので、実施不可能。○期末レポート(筆記試験）は返却していない。こちらで保管している。○1コマを複数名の教官で担当しているため、1人当りの授業時数が多くないが試験結果を返却するには至らなかった。○試験後の授業がないため、返却する機会がない。○レポートを返却したいが、返す手段がない。○期末試験については行わなかった。ただし、問題を学生が授業中に行ったワークシートの中から出題し、配点を伝えて、学生が自己採点できるようにした。小テスト・発表については行った。○通年であれば必ず返却するが、半期では返却のチャンスがない。○返却したいが、テストが最後の日に予定されている。幸運（？）ながら、1クラスは13年度、再度担当するので、学生にペーパーを渡し、評価基準を告げようと思う。○行いたいと思いますが、機会がないようです。○オーラルはその場で知らせた。筆記は臨時のみ可能。レポートは返却しなか

ったが、一覧表（成果など）を渡した。○レポートを返却しようとも思うが、非常勤のため常に大学にいないため、どのようにしたら返却できるのか分からない。

3.11　自分がつけた成績評価について

最終的につけた学生の学業成績評価に対し、担当教員自らどう思っているのであろうか。自分の成績評価は甘いと思っているかという問に対し、そう思うが20（25）％、強く思う５（５）％、合わせて25（30）％が肯定的である。一方、全くそう思わないが７（２）％、そう思わないが24（30）％で、合わせて31（32）％が否定的（甘くない）である。どちらともいえない43（37）％なので、客観的裏づけは別として、自分の成績評価の出し方への思いは三分していると言えよう。

3.12　成績評価の困難な点について（設問14）

学生の学業成績の評価に関して、困難を感じたことを25名の担当教員が記述している。その内容を大きく分けると、「クラス間の不整合」、「再履修問題」、「成績評価に関わる基本問題」、「受講生の学力の多様性」、「きめ細かい成績評価を」、「改善模索中」である。詳しい概要は以下の通り。

「クラス間の不整合」

○各教官によって目標設定が異なっており、到達度もまちまちである以上、学生が評価に疑問を感じるのは当り前であると思う（外国語の場合は特に）。現実にそれを話し合う時間が持てない現状では、教科書毎に責任者が各教官に目標なり評価基準なりを伝えるべきではないか。○授業の要求（試験、成績評価を含め）が厳しすぎると、学生により他の授業との比較がなされる。全体でのコンセンサス（バランスをとるため）が必要と思う。○自分の担当する２クラスは同じ基準で評価することが出来るが、他のクラスとの関連はどうなるか、例えばＣと評価した学生は、他のクラスではどう評価されるのか。真剣に日常のLessonに参加すればＤをつけたくない。当然Ｃと＋αでＣとを区別したい。５段階評価はどうか。

「再履修問題」

○特に困難なことはないが、卒業がかかっている学生で“お願い文”などを書いてくるような学生のケースは困る。○４年生の成績不良者がいた場合、追試を課すべきかどうか。○Ｄ評価をした場合は再試験が必要になることが多い。しかし、カリキュラムが過密であって、再履修が大変困難である。そこで結果的にＤ評価を行うことに躊躇してしまう。

「成績評価に関わる基本問題」

○学生に迎合し非常に甘い評価をする教官が存在することと、学生の選択に任せる制度が相まって、勉強しない風潮が一部分的に存在する。何が必要で重要であるかという問題を、学生の選択に任せている現状は改めるべきである。何故なら、多くの学生にその判断能力があるかどうか疑問であり、適切な内容とするための教官の意志が伝わらない。学生による授業評価が勉強しない学生を正当化している面がある。勉強しない学生ほど、分からないのを教師の責任に転化し、自ら学ぶことを放棄している。共通科目を専門科目より軽視している風潮がある。

「受講生の学力の多様性」

○授業のテーマに対する受講生の知識・理解度にばらつきがあったり、未知であるので、絶対評価を行うと、難易度の設定が難しいと感じる。○クラスによっては同質の学生が多く、大多数が同一評定になるクラスもある。○実技系以外の学生に、半期という限られた期間で、実技を伴う評価は困難。又、作品鑑賞を中心にしたレポートも相対評価には抵抗を感じる。○力があると感じる学生の多いクラスだったので、困難を感じることはむしろ少なかったです。こちらが言葉足らずか

（？）と思った授業でフォローしてもらった感がある程でした。○不本意な評価を行っていること。自分の望むレベルに達する学生はほとんどいない。○実際の技能を身につけたかどうかが評価の対象となるので、学生の個人差が大きいことにどう対処するか難しい。今回は補講を行ったが、日常の授業でどう個人差に対応できるかが課題である。

「きめ細かい成績評価を」

○評価基準がA、B、Cの3段階しかないため、きめ細かな評価ができない。具体的にはAにすべきかBにすべきか、あるいはBにすべきかCにすべきかで判断に迷うことがある。

「成績評価が困難な授業形態や施設・設備」

○オムニバス方式を採用すると、質のいいレポートを求めること自体が不可能なので、甘くならざるをえない。○コンピュータの実習授業であるため、設備面でキャパシティに限界がある。現在のキャパシティを考慮すると、多くの者を不合格にすることはカリキュラム運営に問題を引き起こすことが予想される。その点で、今年度は特別に制限を感じることはなかったが、今後はどうなるか分からない。今回は出席をかなり重視した。学生の中には受講の必要が無い程に、コンピュータを理解している者がいる。その者に、ほとんど無駄な時間を強要するのはよいとは言えない。その点で、出席重視の評価は必ずしも適切とも言えない。

「改善模索中」

○どのような評価基準を設定しても、最終的には採点者の主観に帰着するので、可能な限り公正公平であるよう心掛けることの難しさを感じる。そのため、学生の名前と顔を覚えてしまう出欠調査はやらないこととした。無論、日本国憲法の場合は、そのため多大な時間を割かねばならないので、事実上実施できないのであるが。○今年度よりの新しい授業で、こちらの目標設定、複数担当者などの調整で試行錯誤の状態が今後も続くだろう。○情報教育入門という初めての担当なので、手探りであった。○必修ということで出席はするが、時間枠（3～4限）や穏やかな季節の時期などには寝ていて、学習態度が学習内容を左右することが少なくない。指導技術も反省すべきであるが、実際には何を評価しているか、疑問に思われることも少なくない。○その時その時で、テキスト、対象学生のクラス等、いろいろな要因で変る。○とりわけ英語コミュニケーションに限ったものではないかもしれないが、コミュニケーション能力を評価する際、「判ってはいるが」言えない学生や、文法的に間違っているが（つまり、broken Englishのような言い回し）積極的に発言しようとする学生の取り扱いについて、その採点基準をどこの当りに設定すべきかでおおいに悩んだ。○毎回の課題チェックが結構大変である。分担するリピートクラスが多いと一層。○試験結果が悪くても熱心な生徒。点数が高かったものの、出席状況、遅刻の回数の多い生徒。「文法能力はない」とあきらめ、自分でもう落ちたと決めて試験を受けない生徒。○スポーツ科目であり、独特の判断が要求されると思っている。私の場合は単に技能の善し悪しで評価するのではなく、個人の変化を考慮したり、時には個人単位ではなく複数の人間のまとまりで評価する必要もあるのではないかと考えている。

3.13　今回の調査に対する意見（設問15）

設問15今回の調査（「共通科目の成績評価に係る調査」）に対する意見・感想の求めに、14名が意見を寄せられた。記述全体を整理すると、「この調査の意義をどう受けとめるか」、「この調査方法や調査設問の改善点を探る」、「その他」といった内容となっている。以下全意見の概要である。

「この調査の意義をどう受けとめるか」
①意義がない　○調査が多すぎる。調査をし、報告書を出せば良いというものでもない。
②意義がある　○教員の資質向上と自己点検のためには、非常によいものであると思われる。○学生に対するアンケートとともに、自己点検や総括する際の一助となることは間違いない。○いつも義務的に提出していた成績評価を真剣に考える機会を与えられた。愛教大の現状をもっと知りたい。
③調査による改善結果は？　○調査によって実際に改善された事項を知らせて欲しい。○頻繁に行っても、マンネリになるだけ。学生からの苦情・要望は個々の教員に具体的に返して欲しい。こちらとしても改善できるところは改善したい。
「この調査方法や調査設問の改善点を探る」
○入学試験とも合わせて考えていくとよい。考えさせたり、調べさせたりする大学の授業に必要な入試の改善も合わせて行ってこそ、授業の評価の改善も進む。
○提出は電子メールでできるように。出す方も受け取る方（集計・公表）も手間が減る。
○評価の改革・改善のための情報が必要であれば、教官同士が直接意見交換するような機会を作って、“本学で行っていきたい授業目標と評価”について議論することか、と思う。これは入試(どんな学生を望むのか）が教員養成（どんな学生を育てたいか）にも関わる問題なので、恒久的に手がけていくことが必要かも。
○アンケートをやる時期について―テスト期間の前にやれるように配慮を希望する。自分のテストは75分とかあるので、学生がしっかりアンケートを記している時間はない。通年タイプの授業なので、そういうものは年度末の１回でよいのでは？
　アンケートの問題が自分の要求するものと異なる場合どうしたらいいか？
○いろいろな制限のある中、授業・カリキュラムを運営していく必要がある。現状は必ずしも100％適切な状態であると言えない。今後、制限のある中で、改良していく必要があると思うが、名目重視(改良項目を挙げること)で行うのではなく、効率的に実質を伴う改良を目指して頂きたい。
　「その他」の意見として、下記のような共通科目の現状に対する批判が挙げられている。
○共通科目というスタイルに反対です。中止・廃止を求めます。○とにかく、(学生が）勉強をしなければ試験に通らないという文化をつくるべき(現在はそうではない)。

4　さいごに

　以上の調査結果（2000年度後期共通科目担当教員対象、回収率53％)を次のように要約できよう。
（１）　多くの担当教員は、成績評価は学生の学修成果を到達度で知らせるために行うもので〔87（前期76）％〕で、その成績評価の方法と基準を受講生に可能な限り説明すべきであると考え〔70（79）％〕前期とほぼ同一の傾向を示している。しかし、成績評価の方法と基準を実際に示している割合が、86％から37％に半減している。
（２）　評価手段は筆記試験〔46（54）％〕、報告書審査〔42（35）％〕、作品及び実技審査〔16（１９）％〕、口述試験〔11（３）％〕という割合（重複あり）でなされ、多くの場合それに出席状況が加味されいる〔76（83）％〕。
（３）　評価方法は次のような絶対評価が多い〔８７（76）％〕。最低限の目標を設定し、そこまで到達した者を合格とし、その到達度によりA・B・Cを決める。
（４）　担当教員のほぼ半数が、学期の途中で臨時試験・課題（報告書の提出など）を課し学生の学修の進捗状況を評価しながら授業を行い、さらに、全体の３割の担当教員が採点結果の返却など積極的に対応している。

（5）　自分の成績評価について「甘い」、「甘くない」、「どちらともいえない」といった思いが三分しているが、大多数は厳正な成績評価を求めている〔86（77）%〕。ただし、自分の成績評価については「どちらともいえない」が前期の37%から43%に若干増えている。

（6）　成績評価を行う上で、「クラス間の不整合」、「再履修問題」、「成績評価に関わる基本問題」、「受講生の学力の多様性」、「きめ細かい成績評価を」、「改善模索中」といったことで難しさを経験し問題を抱えている。指摘されている問題を解決するためには、多くの場合、個々の担当教員レベルを越え、「グループ」又は全学レベルで取り組む必要があると思われる。

さて、実際にどのような成績評価がなされたのであろうか。学業成績評価の結果を資料として、付録1に掲載する(共通科目委員会として了承)。「適正な成績評価」は、決して個々の授業と切り離し、形式的に画一的に基準を揃えることではない。しかし、例えば同一授業科目での成績のばらつきについて、評価された学生当事者等に、一定の目的を有する協働体としてわれわれ大学側は、どのような責任ある応答・説明をすべきであろうか。回答者から指摘されている通り(3.12参照)、「適正な成績評価」は前期と同様に、引き続き課題となっていると判断する。

最後の設問15に対する回答も、今後に向け貴重である。例えば、「調査だけに終始していないか」、「具体的に改善されたことは何か」といった主旨の疑問に対して、共通科目委員会等が授業改善に向け努力を重ねるとともに、改善を図ったその都度丁寧に説明していかないと、調査ばかりしても無意味と判断され回答自体を拒否されかねない。

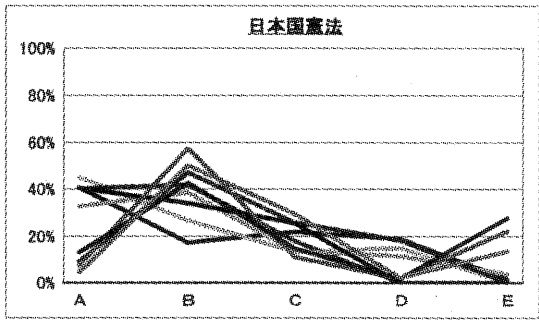
貴重な時間を割き、さまざまな角度から熟考の上、有為な回答を寄せて頂いた、共通科目の担当教員各位に深く感謝致します。この調査報告が、共通科目教育の改善に大いに活用されることを切に望むものです。

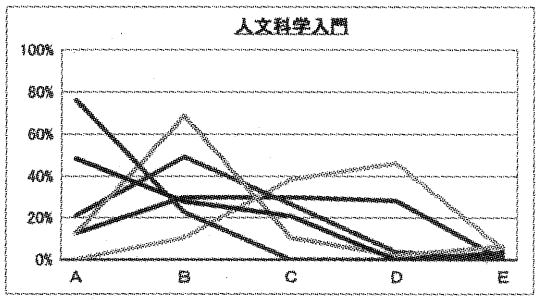
付録1　2000年度後期1学年共通科目の学業成績評価の結果

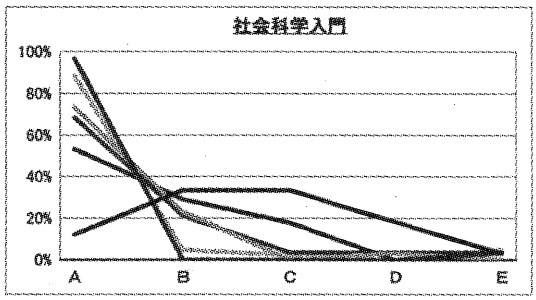
クラス毎のA、B、C、Dの取得割合（%）。

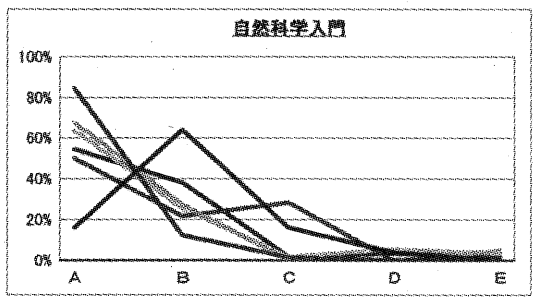
ただし、母数を受講登録数とし、成績評価の資格を失った（学生側の放棄を含む）と判断された割合をEとした。

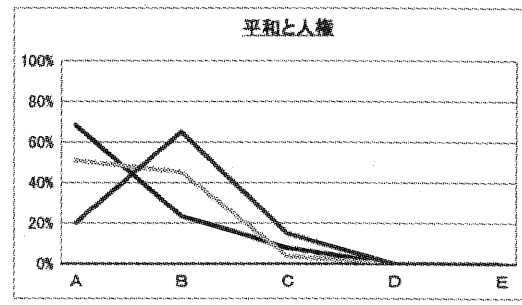
クラス毎にABCDEの間を実線で結んでいる。授業と切り離して成績評価の結果だけを記したので、この図そのものから成績評価の個々の結果の当否そのものについて読み取れないことに注意されたい。

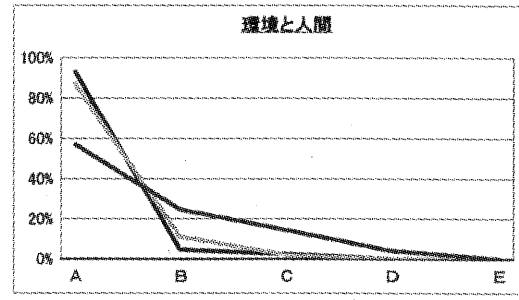

日本国憲法
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

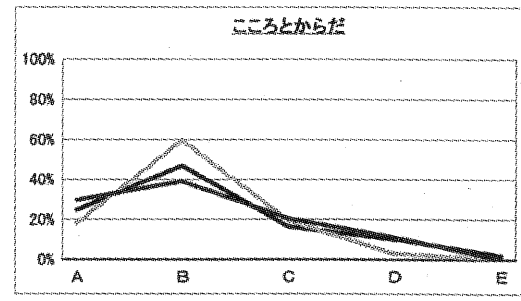

人文科学入門
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

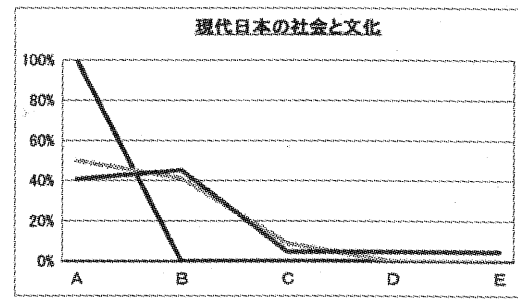

社会科学入門
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

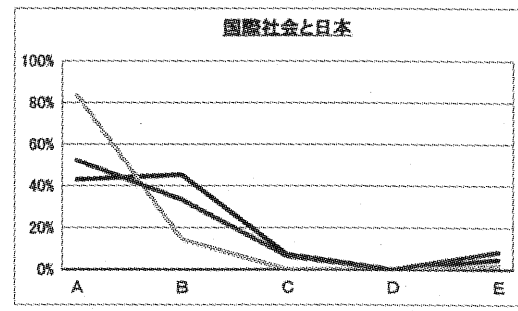

自然科学入門
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

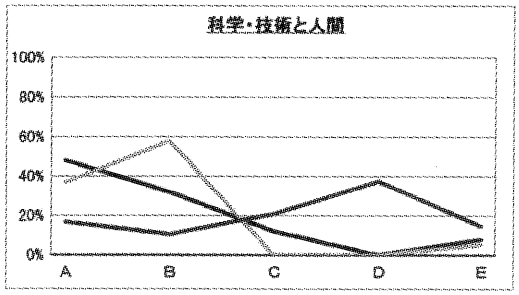

平和と人権
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

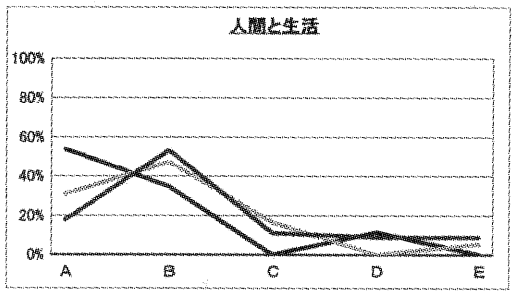

環境と人間
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

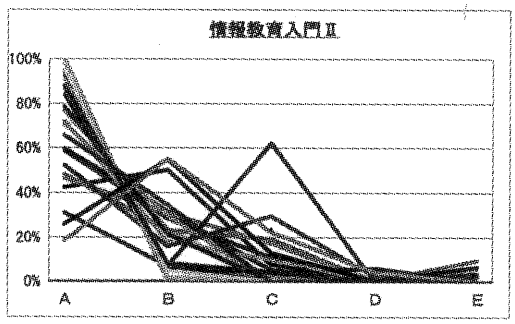

こころとからだ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

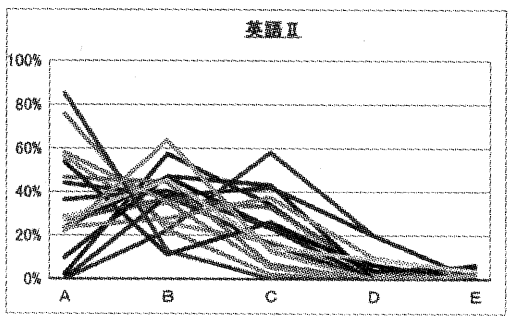

現代日本の社会と文化
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

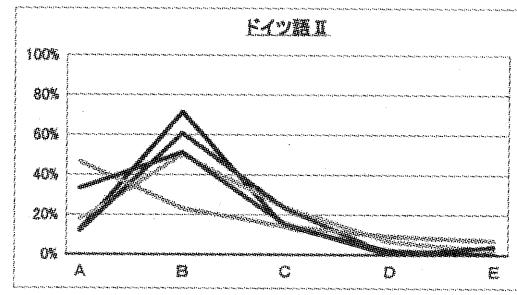

国際社会と日本
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

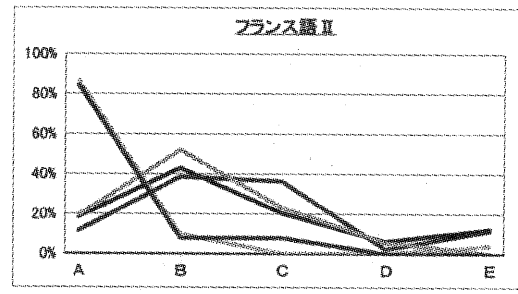

科学・技術と人間
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

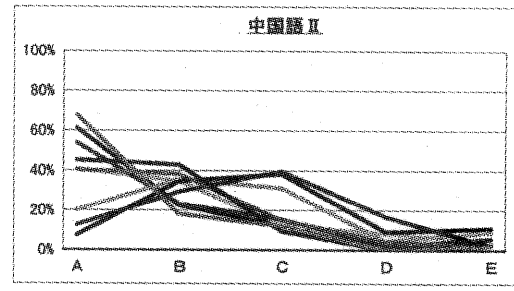

人間と生活
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

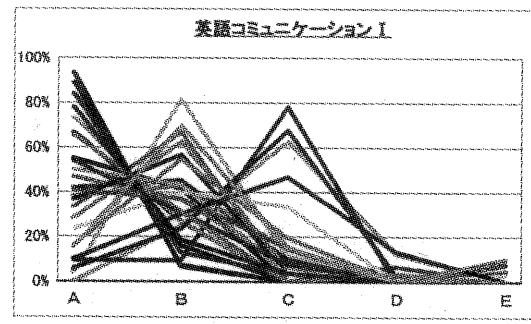

情報教育入門Ⅱ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

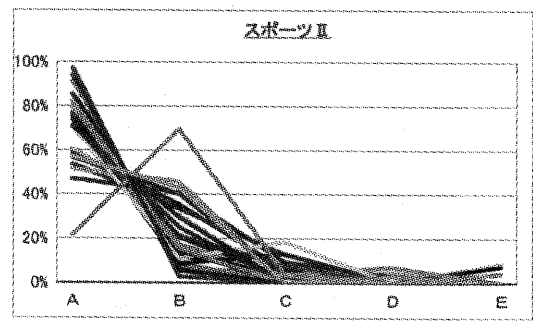

英語Ⅱ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E


ドイツ語Ⅱ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E


フランス語Ⅱ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E


中国語Ⅱ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E


英語コミュニケーションⅠ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E


スポーツⅡ
100%
80%
60%
40%
20%
0%
A
B
C
D
E

付録２　設問２の回答

設問２の内容：あなたの授業で設定した（１）到達目標（あるいは重視事項）と実際の（２）到達度、実施した（３）評価方法と（４）評価基準又はA・B・C及び特にDにおける評価ポイント）を、実施した授業に則して具体的に記述して下さい。

なお、設問６－２の回答（受講生に「評価の方法・基準」を示した内容）を（５）として付け加えた。

「日本国憲法」

1—（１）授業の目標としては、①ものの見方・考え方を養い、社会的な視野を広げる、②社会において「憲法」の果たす役割を理解する、③われわれの日常生活で日本国憲法とのつながりを考える。この３点におき、シラバス及び１回目の授業ガイダンスで説明した。（２）到達度としては、上記の目標に沿って、授業を実施して、試験を行なった結果、ある程度は達成できていると思う。「共通科目」という位置づけからも、法律論的に深い知識を修得させるというよりも、現代社会における憲法の位置づけと日常生活におけるかかわりについての理解を到達目標とした。（３）評価方法としては、出席状況と学期末試験をその対象とした。前者を１／４、後者を３／４の割合で点数化し、その総合評価を行った。（４）上記の評価方法で点数化したものを、100点満点の点数に換算し、A（85点以上）、B（70点～85点未満）、C（60点～70点未満）、D（60点未満）の評価基準に当てはめて、成績評価とした。なお、評価の方法と基準については、すべて学生に説明した。（５))評価方法として、出席状況と学期末試験をその対象とすること、それぞれ点数化して合算すること、前者を１／４、後者を３／４の割合とすること、100点満点に換算し、A（85～）、B（70～85）、C（60～70）、D（～60）に当てはめて、成績を出すこと、を授業の中で説明した。

2—（１）知識の伝達、知的刺戟（一種のカルチャーショック）、学問というものの基本的手続。（２）基本的知識の伝達については、シラバスに即して８割方は達成できたと思われるが、試験の答案を見る限りでは、内容が難しいとか、そもそも興味がないとか、ノートを取る代りに、レジメを用意して欲しいなどという感想があった。しかし、一部の学生については、相当程度の知的刺戟を与えたようで、中には受講学生ではない学生もみられた。※後期は祝祭日やその代休日に月曜日の当ることが多くて、授業の継続性に大きな支障がみられた。

（３）①学期末の試験による、②レポート等の方法は採らない。（４）①基礎知識の修得の有無、②論理性（独断的でなく、説得力のあること）、③時事問題の関心。

3—憲法の成立過程を詳細に講義し、板書を多くすることで流れを理解してもらうようにした。憲法史としての講義を織り込んだ。自身の意図した部分は一通り講義できたように思う。評価として、学生にレポート試験か筆記試験かを学生のアンケートを通じて選択してもらい、レポート試験での評価を基本、それに加えて数回にわたる出席を取って総合で評価する様にした。授業では、私語が極めて少なかったのは良かったと考える。（５）生徒に評価方法として、レポートか通常の一般試験かを選択させる指示を行なった。数回出席を取りプラス点にするという指示をした。

「人文科学入門」

4—（１）美術史における基本的なものの見方を実例に即して学ぶという目標だったが、（２）到達度はあまり高いとは言えない。年々学生の理解力は落ちている。（３）選択肢式の簡単な試験により、（４）単純に点数によって評価を行った。50点未満をDとした。

5—（１）よく見る（見させる）。好奇心を持つ

(持たせる)。(2) ふつう。(3) 平常点 (出欠+小テスト) +期末レポート。(4)(80～) 85～：A (よい) たいへんよい、75～：B 満足している、65～：C 間に合っている、～64：間に合わない。(5) 何によって判断するか。出欠20%、小テスト30%、期末レポート50%。質の高さに応じて、よい A (80～)、満足できる B (75～)、間に合う C (65～)、間に合わない・十分でない (～64)。

6—(1) は、文学作品の読み方を学び、それを基に様々な作品を読み、自分で分析・解釈を行い、800字、1200字、2000字の文字にまとめる力を身につける。(2) 文学作品の読み方、構造主義的・精神分析的・解釈学的等について学ぶことと、それを実践することは必ずしも十分に修得させるには至らなかった。ただ文章にまとめる力は半分以上の受講生が上達したと思われる。(3) 5回のレポートを授業中の発言。(4) レポートを A、B、C、D に分け、5回の平均を出す。また、微妙な場合は授業中の発言等を加味する。(5) よいレポート (A 評価) が備えているべきポイント：パラグラフ、論の展開、正確な言葉使い等。

7—(1)・(2) はほぼ一致した。(3) はテスト形式プラス出席状況を参考。(4) ふつうは B。よいものは A、わるいものは C。D は明らかにやる気の感じられない準備不足のもの。(5) 前期を例に、それほど厳しく落とすことはないと言った。まじめにやればできるので、ちゃんと勉強してくるように、とも言った。

「社会科学入門」

8—(1) 理論と実生活との関わりから、社会科学への興味を抱き、自ら調べて疑問点をさがすこと。(2) 大体到達目標に達した学生が多いようである。(3) レポート及び試験。(4) 試験評価で ABCD。(5) 出席、授業態度を加味すること。レポートについては必要な事項等について説明。試験については範囲、出題形式等を説明。

9—(1) 社会科学的なものの見方について、歴史学、社会学、経営学の三つの視点からアプローチすることを目標とした。(2) 到達度は、それぞれのテーマに対するレポートから読み取れる理解度、応用性などから判断した。(3) 45名の受講者に対して、A 評価24名、B 評価13名、C 評価8名であった。(4) 各視点における評価の差は、歴史学、社会学的アプローチよりも、経営学的なアプローチにおける方が若干大きかった。(5) ①複数教官による授業であるため、出欠は学期全体を通して行なうこと。②複数教官がテーマ毎に、毎時あるいは担当期間の終りに試験やレポートなどでその到達度をチェックする。③教官数に応じた持ち点を総合し、最終的な評価を出す。

「自然科学入門」

10—基本力が身についているか否かがポイント (5) ポイントを外した解答は、得点にならぬこと。

11—(1) 重視事項：身のまわりに数理的法則を見い出し、数学に親しむこと。(2) 学生の感想を読む限りでは、目標はある程度達成されたと思う。(3) 授業の作業へのとりくみ具合と、レポート。(4)(3) の課題すべてにおいてある程度の成果が得られたと思われるなら A；以下成績次第で B 又は C；基本的に D はなし (E はありうる)。(5) 授業中の作業への取組具合とレポートの成績を総合する。

「平和と人権」

12—この科目は、複数教官が持っている。そのため、個人レポートについては、基本的に出題教官の基準に任せているが、体験や具体事例をもとに自ら考えを明確に論じているものに対して評価が高くなるよう配慮してもらっている。(5) ①参考文献を明示すること。②授業内容や自らの調査に基づいた論理性のあるレポートであること。③単なる感想ではないレポートであること。

「環境と人間」

13—（1）「環境」に対する多様な見方や考え方を認識し、理解することを到達目標とした。（2）おおむね達成できたと考えている。（3）8名の教官により、オムニバス形式の授業を行ったため、評価方法は教官によって異なっている。テスト形式とレポート形式で実施し、点数化し、平均をとり評価を行った。（4）80点以上をA、70～80未満をB、60～70未満をC、60未満をDとした。（5）初回のオリエンテーションの時に、教官別に授業内容の概略説明を相当行なったのち、評価は各担当教官の授業の最後でテストなりレポート課題を出して、評価を行なう旨を通知した。

「こころとからだ」

14—授業で紹介したり、解説を加えた事項のみを問う評価法となった。

15—（1）「こころ」の状態が「からだ」に影響を及ぼすことを具体例をもって説明でき、かつ自分のコントロール手法を確立するための基礎固めをする。（3）ペーパーテスト「以下のことばを最低1回は使って、からだとこころ、こころとからだのつながりを説明する文を作りなさい。心身症、こころ、からだ、自律訓練法とは、バイオフィードバック法とは、不登校、および接続詞は適当に。」（4）概念地図法を応用した分布で、認識を確かめ、教養としてのレベルに達しているか、絶対評価する。（5）（3）に記述した内容とほぼ同様のものを板書で示した。

16—（1）（2）からだの仕組み（特に骨、筋肉）、その役割と重要性。医療の現代的課題への認識を高める。→自分のからだについて意外と理解していなかったものが→改めて考え直し、現代社会でのからだづくりの必要性を理解してくれたと思う。（3）（4）毎授業の取組（ノート、感想など）、理解度（テスト）出席度、Dは欠席5回以上、or テスト×、and/or 毎時の評価。

「現代日本の社会と文化」

17—入門において、専攻外の学生に対して、こちらも手探り状態で焦点を絞れず。よって到達目標は立てられず、ただただ受講生の日常とかかわりの中におけるノンジャンルの作品鑑賞で、半期は終わってしまった。受講生にも大いに不満が出ても当然であると思い覚悟しております。評価は、半期を通じて概ね出席状況が良かったので、全て同じにしました。

「国際社会と日本」

18—（1）到達目標・重視事項：私の授業は東南アジア文化への入門であり、言語及び文化（主に音楽や映画などの大衆文化）の面からいくつかのトピックスを通じて紹介した。学生の異文化への興味を持ってもらうことを、重視事項とした。（2）到達度：授業での反応から判断するしかないが、より親しみのある分野（芸能など）には関心が高かったが、少し学術的になると反応は悪かった。（3）評価方法：レポートによった。輪講なので、この授業に対してレポートを出した者は一部である。レポートのテーマ：東南アジアの国家または民族などから一つのテーマを選んで、その文化の概要をまとめよ（例：マレー人の文化、マレーシアの文化、バリ島のヒンドウー文化等）おおよそ、40字×40行を1ページとして、A4紙5枚程度。参考にした文献を必ず記すこと。（4）評価基準：こちらが要求したことをクリアしていること、内容のまとめ方、体裁などを重視した。文献を参考にしないと書けない内容なので、オリジナリテイは問わなかったが、それでも自分の意見を全面に出していた場合はAとした。「参考にした文献は必ず記すこと」という要求を守っていない者をCとし、その他はBとした。

19—到達目標には達しなかった。2／3くらいである。我々のグループはオムニバス方式を採用したので、1人の持ち回数は3～4回である。こんな回数で目的が達成されるとは思えない。中途半

端もいいところである。共通科目のあり方そのものを中止・廃止を含めて再検討ねがいたい。評価の方法はレポート方式をとり、評価基準は正しく書けているか否かを中心とした。

20—今期の授業は、一つの科目を3人の教官で担当するもので、私の担当はその内の4時間分であったので、その担当分について評価をまとめる。（1）設定した到達目標は、授業を通して異文化間の諸問題に気づき、それを契機にして自ら考察を始めること。（3）評価方法としては、「授業で触れられなかった事柄に関連して課題を設定し、そのことについて論ぜよ」という課題のレポートを課した。この課題を考える過程で、文献を読んだり、調べたりして自らの考察を深めてほしいと考えたからである。（4）評価基準は、レポートで考察されている内容の深さと授業への出席率を重視し、出席率の悪い学生はDとした。出席率を重視した理由は、授業の目標が、授業中のディスカッション等を通して、これまで無意識に見過ごしてきた事柄に気付くことであるためである。（2）目標への到達度は、レポートを提出した学生については、ほぼ達成されたかと考えるが、全体としては、残念ながらレポートの提出率があまりよくなかった。

21—（1）ヨーロッパ地域の複雑な民族分布と言語状況の概要を理解し、多くの国が複数の民族により構成されていることを認識すること。（2）おおむね目標は達成されたと考える。（3）レポート。（4）A、B、C、による。Dはなかった。（5）レポートの課題名とどの解説。

22—（1）授業内容についての基本的な理解。その内容について考え、自分なりの見解を持つ。（2）75%～80%。（3）課題レポート。（4）授業内容の理解度、自分なりの見解のまとめ方、出席率。

23—戦後アメリカ映画の主題の変遷を時代毎に分析しながら、その背景にあるアメリカ社会の変遷を見る、という趣旨の講義を行ない、「1990年代のアメリカ映画におけるヒーロー像の特質を述べよ」というレポートを課して、成績評価を行なった。評価を出す際には、（a）1990年代の映画を論じるのに適当な作品を5本以上見た上で分析を行なっているかどうか、（b）それらの作品の相互関連を正しく把握しているかどうか、（c）論旨が明快で、説得力があるかどうか、の3点を評価ポイントとした。そして、成績判定に関しては、それぞれのポイントについて5段階評価をした上で、それらを足したものを総合点とし、12点以上をA、9点以上をB、6点以上をC、それ以下をDとした。

24—（1）授業内で指摘した点の中から、自分でテーマを見つけて、資料を探し、レポートにまとめる。（2）ほぼ条件は満たされていた。（3）内容による(参考にした文献も考慮した)。（4）ABC方式。（5）D：単なる感想、自分の意見だけを記したもの、エッセイのようなものはD評価とする。

25—（5）課題についての必要事項などについて示した。

「科学・技術と人間」

26—（1）到達目標（重視事項）：①16世紀頃に始まる科学革命、②ニュートン力学をもととした自然観、③量子論をもとにした自然観、④ハード・パスとソフト・パス、⑤ホロニック・パス。（2）到達度：A－8人、B－5人、C－10人、D－18人、E－7人。（3）評価の方法：レポートと試験。（4）評価基準：レポートは、基準に達しない者には、再提出させた。A－85点以上、B－70点以上、C－60点以上、D－60点未満（実施要領の通り）。

「人間と生活」

27—人間と生活入門を3名で担当し、「人間と性」に関する入門的な内容を分担した。（1）これまでの自分の「性」のイメージを広げる、知らなか

った見方に気づく。（2）ほぼ同上。（3）①レポート（報告書審査）＋②授業活動における課題提出物＋③出席。（4）（3）③学内規程どおり。但し同担当教官の提出に対して3回以上欠席の場合“D”とする。②①はA～Dで評価。Dについては、課題が完成されていない場合、提出されていない場合である。（5）課題レポート「人間と性入門では何を学びましたか？　印象的・大切だと特に思った内容を取り上げ、今後、それが自分の生活（人生）にどのように関わってくると思うか？また活かしたいと思っているかについて　述べよ」。他の入門分担教官2名の授業（生活と環境入門、ライフコース入門）の内容と関わらせてもよい（口頭説明）、レポートの量は不問（但し、課題が書けていること）、〆切り2月26日（金）。

28—（1）授業内容（2～3年次へ続く）の全体像の紹介、内容に即した活動の組織と実施を通して、大学における探求的学習を学ぶこと。（2）学生の発言がやや少なかったが、おおむね目標は達成された。（3）出席、活動への参加によって評価。（4）3人の教官で担当し、1人の担当でも出席回数が少なければD。（5）評価基準になる事項：①出席、②活動への参加、③3人の教員が評価し、総合すること。

「情報教育入門Ⅱ」

29—（1）ワード、エクセルで何ができるかを知る。（2）実用文書の作成、計算の実行。（3）課題に対するレポート（ファイル）の提出。（4）提出が有り、その内容による評価(出席を加味)：両ソフトを使えれていればA、片方のソフトを使えていればB、両ソフトの理解不十分C、未提出D。（5）課題を与え、そのレポートの結果を見て成績をつけるということ。

30—（1）実際に自分で操作できるようになるかどうか。（2）目標の8割程度。（3）レポート。（4）レポートの課題の内容により評価。（5）評価の方法と基準。

31—（1）パソコンを実際に操作し、作業ができること（インターネットやメールのやりとりを含む)。（2）ほぼ全員が到達。（3）メールによる出席確認とメール添付によるレポート提出。（4）出席・レポート内容。

32—（1）到達目標：①電子計算機の構造について概略の知識を得ること、②パソコン内部におけるデータの表現について概略の知識を得ること、③パソコンにおけるファイル管理について概略の知識を得ること。（2）到達度：学生個人による差は大きいものの、過半数は満足しうる到達度であった。（3）評価方法：レポート課題（児童に「パソコンって、本当はどうなっているの」と問われた場合に何をどのように説明するか)。（4）評価基準：点数化は行なわなかった。上記（1）の3項目における到達度を評価した。（5）レポート課題を提示し、学期始めに示した3つのポイントを押さえて書くように口頭で追加した。

33—（1）「初心者が、コンピュータに慣れ親しみ、日常的に使用するようになってもらう」状態をめざした。（2）自分自身は満足していない（学生によっては、最初からインターネット以外コンピュータを受け入れない者がいた)。（3）出席状況・提出物の評価。（4）D：出席不足の者、出席状況がよくなく、かつレポートが出ていない者、C：出席はあるが、レポートが良くない者（ムチャクチャ)、B：レポートは完全ではないが、半分以上できているもの（かつ、出席が十分あること)、A：出席、レポートとも良好な者。（5）レポートの提出は、最後に行なってもらいましたが、課題は中頃と終り頃の2度出した。その時に、レポート提出を要求するとともに、説明した。

34—学生に与えた課題に関して、それをメールによって提出させ、そのメールによって得られた資料に基づいて評価した。基本的には、こちらの求めた課題ができていればAを、それの不足の程度によりランクをつけた。

35—数回提出されたメールによるレポートにより評価。

36—（1）到達目標・重視事項：ワープロソフトによる文書作成の技術、および日本語などの言語の研究に必要なパソコンとインターネットの利用技術を習得する。（2）到達度：人によって若干のばらつきがあるが、こちらの要求したことは理解し、課題をこなしていた。ただし、上に挙げた日本語などの言語の研究に必要なパソコンとインターネットの利用技術は、一年生の学生にとっては、まだどのように応用すればいいか分からないことも多いであろうと想像される。今後の日本語教育、日本語学などの授業との相互作用によって、理解も深まり、応用することもできるであろう。（3）評価方法：何度かレポート課題を出した。「電子メールの書き方」「日本語テキストデータから、正規表現を使ってある文字列を検索する」「パワーポイントを使って、プレゼンテーション用のファイルを作成する」などである。（4）評価基準：上に挙げたような課題をこなし、こちらの要求すること（レベル）をクリアしていれば合格(A)とした。課題提出が遅れた場合などは、B評価とした。

37—（1）グラフィック系アプリケーションの基本的操作方法とデジタルデザインワークの進め方、デザインの基本の考え方の修得。（2）6割程度。（3）出席及び提出物。（4）出席率＋課題の点数評価。

38—（1）と（2）にはズレができてしまった。突発的アクシデントが多かったため。（3）は、出欠・課題・テストを総合して採点した。（4）は、テストの比重が大きいが、まじめに出ていればできる内容にし、出欠や課題も点数に入れた。

39—（1）ワープロソフト・表計算ソフトの基本的な使い方を習得すること、コンピュータウイルスに対する態度を身につけること。（2）ソフトウェアの使い方については、約半数の学生が水準に達したと思われる。水準に達していないと判断した学生には、補講を実施した。（3）具体的な課題を探す実技試験。（4）①適当なWebサイトから必要なファイルをダウンロードできること、②ダウンロードしたファイルにウイルスチェックをかけ、適当に加工できること、③加工したデータから適当な考察ができること。このうち①②番目が時間内に達成できなかった者をDとした。（5）適当なWebサイトにアクセスし、必要なデータを入手できるか、入手したデータを適切に加工し、見やすいグラフを作成できるか、自分の考察を読みやすくレポートに作成(印刷)できるか、データの読み取りが適切にでき、読み取ったことから、適切な考察ができるか。

40—（1）パソコンの最低限の使用能力の育成。（2）ほぼ達成。（3）試験（ワープロ課題のフロッピー提出）。（4）A：ほぼ達成、B：問題あり。（5）ワープロでちょっと複雑な文書作成。

「英語Ⅱ」

41—（1）各章のテーマを概説と図版等で説明してあるが、その英語をきっちと読み取り、理解しているかどうか。（2）その都度学生を指名して、理解の程度を確認した。ほぼ期待通りに進んだと感じている。（3）期末試験に、出席状態と指名した時の判断を加えて、総合評価をした。（4）A、B、C、Dで、C以上がパス、Dは不可。

「英語コミュニケーション」

（1）各章のテーマのもとで構成されている英語による「語らい」(formal/informal）を理解し、運用できること。英語・米語の違いも理解すること。（2）その都度学生を指名して、理解・運用度を高めた。テープを聞かせた。ほぼ予定通りに進んだ。（3）期末試験に出席状況と指名した時の出来・不出来を加えて、総合評価。（4）A、B、C、Dで、C以上がパス、Dは不可とした。（5）絶対評価であること。期末試験を行なうこと。授業中に指名すること。その時の学習程度も評価に

加えること。

「英語Ⅰ～Ⅳ」

42—担当した複数の授業間で異なるため一概には言えないが、上手く行ったと思われる授業の例では到達目標に即した試験問題に対して受講生から満足の行く解答例が得られる場合である。これに反して、目標到達が実現できなかったと思われる例は、前述の解答例からは実現できたのか否か判断すらつかないような場合である。なお、評価方法は授業での発言内容、出席状況、提出物、定期試験に拠り、その基準はA・B・Cとした。D評価は、評価方法における発言内容と定期試験で不合格となった場合のものである。（5）学期末の定期試験を受験し、良い成績を修めれば単位が取得できるという誤解を避けるため、平常の講義から評価が始まっている旨を伝えた。

43—（1）平易な英語で書かれた理系の英文を読み、視野を広げる。（2）前期のアンケートの結果、試験の結果から、充分に到達していると思われたので、後期からはリスニングの教材を加えた。（3）前期・後期ともに、リーデングのペーパーテストを9割、出席状況を1割で評価した。（4）（3）の100点満点で、大学の規定通りA・B・C・Dを決めた。

44—（1）ある程度の量の英文を構造的に把握する訓練をする。情報過多の時代において自ら必要なものと不必要なものとを選択し、読みにおいても自らの必要に応じて方法を変化させることを認識させたい。同時に将来において論文などさまざまな英文を書くことの指針を与える。（2）基礎的なことは理解できた。（3）筆記テスト。（4）絶対評価。

「英語コミュニケーション」

（1）各時間に一つのIssueを与え、Listening Writing Discussionにより、各自の社会的問題に対する意見を求める。（2）Discussionは難しい。（3）日常の提出物（各Issueに対する各自の意見を提出してもらう）と定期テスト（Listening＋筆記）を総合的に判断。（4）絶対評価。（5）平常授業の態度、提出物、及び期末筆記テストを総合的に評価する。

45—（1）テクスト内容に則した技能の習得が、概ね出来ており、かつその運用に際して、自らすすんで用いようと心掛ける。（2）三分の二程度の学生は、ほぼ到達目標に達したと思われるが、残りの三分の一の学生についてはやや疑問が残る。（3）授業中の口頭による発表と講義終了時に提出するチェック・シートの得点をポイントとして可算していく。（4）（3）において実施した内容による獲得ポイントに、通常の定期試験の得点（ほぼ50：50の割合）で、80以上をA、70以上をB、60以上をCとした上で、それに満たない場合は不合格とする。（5）テクスト内容を一覧させ、授業の中で修得することを目指す技能を、項目を立て分けて板書し、チェック・テストによって習熟度を深める旨を伝えた。

46—①扱った教材の内容を理解する—積極的に予習し、新しい文化的・専門的知識を学び、授業に積極的に参加しようとしているかどうか。(30%)
②上記で学んだ内容を自分の言葉で（曲想で）表現できるかどうかを公開の場で発表する。(30%)
③①及び②が確実に身についたか（自分のものとなったかどうか)を筆記試験で確かめる。(40%)
（5）①に書いた通りをシラバスに表記し、テスト前にも示した。

47—両授業ともまずまず目標を達成したように思われる。グループを中心にした発表形式の授業は学生の活動を活発にできたと思う。評価は、出席・テスト・議論といろいろな点を考慮したが、確かに発表や議論という活動の点数化は難しいと思うので、評価基準について考えることが必要だと感じている。

48—（1）①映画の中の、natural speedの会話を、聴きとり、理解する力を身につける。②映画の脚

本をもとに、実際に自分たちで英語のセリフを話し、演じてみる。(2) ①聴解力がどれだけ伸びたかという点については、かなり個人差があったようだが、洋画を観る時に吹き替え版や字幕に頼るのではなく、英語を聴き取ろうとする意欲は芽生えたようだ。②グループに分けてやらせてみたところ、セリフを覚えきれず、準備不足が露見したグループから、完成度の高い発表を行ったグループまで様々だった。(3) 平常点(出席と小テスト)、発表、後期試験、各三分の一の割合で総合評価を出した。(4) 点数化して、以下の基準で決定した。85～100点→A、70～84点→B、60～69点→C、59点以下→D。(5)(3) と同じ。

49—リスニングの能力の向上を目指した。学生の反応を見てレベルを下げて実施した。毎日の授業で指名を多くした。テストにはリスニングのテストも含めた。授業の出席及び参加意欲も加味して評価した。(5) 問題の形式、出席、態度などの評価方法を話した。

50—(1)「英音法」とそれに基づく「リズム読み」の仕組を理解させ、学生達自身でもそれを実施できることを目標とした。(2)学生達の理解度は、概ね良好であった。また、授業時における彼等の英語の音読は、開講時には「棒読み」の者が多かったが、2月時点ではかなりの者が素晴しいリズムを修得するか、もしくは「素晴しいリズムとは何か」を理解した上でそれに近づけようとする努力をしているのが認められる状態まで到達した。(3) 授業では「歌」を教材にしていたが、何曲かに一曲課題曲も設定してその曲を「リズム」から始めて英語らしく読み、歌えるかをみる実技試験を行った(計4回)。また、冬休みの課題として自分の好きな曲(歌詩)にリズム読みのための強弱記号をつけて提出させた。(4) 課題曲については、「歌のうまさ」は問わない。「英音法による語の強弱が合っていること」と「はっきり聞こえるように音読している(歌っている)ことの2つのポイントを重視した。学生達が自ら歌詩(の語)に強弱記号をつけるような場合は、それが英音法の基本に合っているかどうかをチェックした。よって、実技については、リズムの強弱が英音法に合って、はっきり大きな声で音読できればA、どちらかがやや不十分な場合はB、両方とも不十分な場合はCとした。冬休み課題の場合は、学生が作成して提出した英音法プリントと、同時に出してもらったその曲の音源をてらし合わせてリズムの強弱が合っているかを確認し、おおむね合っている場合をA、やや不十分な場合をB、問題がある場合をCとした。典型的な評価は、課題の4回分と冬休みの課題を合わせて5回分の評価を平均したものをもとに出している。

51—(1) 到達目標:日常会話に必要な基本的表現力と聞き取り能力を高めること。(2)到達度:英語によるコミュニケーション能力の多少の上達は認められた。しかし、設定した達成レベルに達していない。(授業を進める過程で多々反省すべき点があり、次年度の授業でそれらの経験を生かしたい。)(3) 評価方法:授業参加への積極性50%と学期末の筆記とリスリングの試験50%を考慮して評価した。(4) 評価基準:授業参加への積極性を評価する基準は、授業中に行う教員と学生との質疑応答を学生の平均的能力をBとして、教師が三段階評価する。また、学生によるペアワークを発表させた場合は、発表を聞く側の学生達に三段階評価をさせ、その集計により評価した。学期末の筆記とリスリングの試験においては、筆記を34点、リスリングを16点の配分にした。総得点を素点からABCD評価に換算するのではなく、クラスの平均値から算出した。3分の1以上欠席した場合は、単位の認定をしなかった。(5) シラバスに記述したものと同じ。

52—(1) コミュニケーションを中心としたテスト内容(設定された状態ごとに聞き取り、それを用いてペア・ワークによる会話を通した情報のや

りとりをする）を、十分活用可能なまでにマスターする。（2）ほぼ達成されたように思われるが、学生のアンケート結果を見ると、または実演を通した発表を吟味すると、概ね20−30%ほどの学生は設定した到達度まで達していないのが現状である。（3）各学生をペア・ワーク、スモール・グループの形式で討論させ、ほぼ一ヵ月に一度程度の割合で発表させた。（トピックスは、事前に与えてある場合と、その場で与える場合の両方を試みた）　その際、会話の運びのスムーズさや受け応えの正確さ、適切な用語の使用等を評価ポイントとして（EX→10、G^{+}→8、G→6、F^{+}→4、F→2、P→0として可算）与え、　最終二回に分けて行ったフリー・トークのポイントと筆記試験の得点を合算して、100〜80→A、79〜70→B、69〜60→C、59以下→D、として評価した。（5）講義に使用するテクストを例示し、その中の習得すべき内容と評価基準を記載した。

53—（1）英語で未知の人とコミュニケーションを取り、親しい人間関係をつくる過程で必要な会話表現の修得と、英語で文章（レポートなど）を書く際に必要なパラグラフ作成の方法の修得。（2）到達度→かなり良かった。（3）試験（筆記）の成績と、毎回の授業における発音／参加度を評価。（4）試験の成績→40%。授業中の態度／参加度→60%。（5）試験の成績、日頃の発言数を評価する。

54—「音読」という方法を使って、日常的な会話のパターンに習熟すると共に、TOIEC形式の小テストを毎時間行い、それによって聞き取り能力の習熟を図った。実際にどの程度まで指導目標が達成されたかに関して、まず「音読」の側面については、英語学習における音読の重要性に対する理解は深まったと思う。しかし、そのことによって各学生の自発的な英語学習がどこまで促されたかは、必ずしも明確にはならなかった。また。TOIEC形式の小テストに関しては、各学生の英語能力の差がもろに出ただけで、これを苦手とする学生は最後まで低得点しか取れない結果に終ってしまい、その意味で、どこまで効果が上がったか、今ひとつわからないままであった。これらの反省点を踏まえ、来年度の授業計画の見直しを図っていきたいと思う。成績評価はTOEIC形式の試験を組み込んだ形の筆記試験によって行い、総得点8割以上獲得した者をA、6割以上をB、4割未満2割以上をC、それ以下をD（不合格）とした。

55—（1）各学生の能力により目標が異なるが、平均70〜80%。（2）60〜70%。（3）Text全体をビデオ、カセットテープでlistening、文字で読解、役割分担で発表というlesson形式。Textに関して口頭質問10問×5が50%、Listeningに関して10問×3が30%、Essay（2、3ヵ月前に告げる）20%、これらに日常のLessonの参加・質問を加える。（4）例えば、あるclass（34名）を大きな差が出来た点で分ける。84点以上2名A、71点以上8名B、その他C。40%到達でき、日常のlessonに真剣に、積極的に参加すればC。

56—3回実施した小テストの合計点により評価。評価基準は下記のとおり。A（100〜80点）、B（79〜60点）、C（59〜50点）、D（49点以下）は不合格。

57—（1）英語の4技能のバランスをとる。自己表現ができるようにする。（2）毎週200語の英文で自分の意見を書くという課題を学生は熱心にやった。その課題をグループ内で、まわし読むことも楽しんできた。（3）教師が各課題に評価と意味の通じない文をチェックした。（4）A＋（200語前後書けている。意味の通じない文がない。スペルミスがほとんどない。一貫性がある）、A・A−・B＋・B（上の条件が満たされていない分1ランクずつ下げる）。（5）30%は出席回数、授業参加度。30%は提出エッセイ（200語×13回）。40%は試験（主にリスニング、語彙、自己表現）。

58—（1）日常的会話ではなく、あるトピックスについて英語を聞いたり話したりする能力の育成。（2）リスニングは向上したが、話す方は積極的に参加する学生は少なかった。（3）ショートテストと、期末テスト、出欠点の総合評価。（4）A、Bがほとんどで、Dはいなかった。（5）ショートテスト、期末テストの総合評価。

59—このクラスの場合、他の担当教科と違い、主に教科書を使ったので、到達目的がはっきりしている。話す能力。聞く能力、語彙の増加などとともに、いろいろな文化や視点についての知識を持つことなど、かなりの進歩が見られたと思う。A・B・Cについては、学期末のテスト（リスニングを含む）、授業中の発言、出席率や課題の提出などによって評価した。（5）定期試験の前に、教科書のどの部分を重点的に学習すべきかを説明した。そして、試験の形式やシラバスを用いてどのような目的の為に学習するのかを示した。

「ドイツ語」

60—（1）新しい外国語であることを踏まえ、発音や文構造といった基本を理解させ、その上で多様な言語表現に対応できる基礎的な学力を目指した。（2）辞書を用いて基本的な文を理解することは殆どの学生にとって達成されていたように思われるが、それが辞書なしでの自在な表現力の獲得までに至らない感がある。（3）出席状況、授業内の練習、課題発表と定期試験により総合的評価。（4）80点以上をAとし、以下Bは70点以上、Cは60点以上、定期試験が60点未満はDであるが、出席状況、課題発表等を平常点として考慮し、C評価を行うケースもある。（5）定期試験の成績を第一義的とするが、平常点により合格のケースもあること、日常の学習を考慮することを伝えた。

61—（1）基本的な文法事項を理解させる。発音の要領を分からせる（→ある程度音読できるようにする。ある程度、耳で聞いて分かるようにさせる）（2）上記目標に対して、いずれも不十分。（3）平常点による（毎回小テスト的課題を課し、授業の理解度を調べる）（4）A：出席がよく授業理解の十分な場合、B：出席普通、授業理解も平均的な場合、C：欠席がちで、授業理解も平均レベルに達していない場合、D：欠席が多すぎ、授業理解が極端に悪い場合。

「フランス語」

62—（1）コミュニケーション能力の育成とその生かし方。（2）やはり、60名以上のクラスですと1対1のかかわりの時間がとりにくいため、個人差が生じやすいと思います。しかし、学生の反応は良く、集中力があり、活発でした。（3）日常のレポートと、試験は聞き取りと書き取りです。（4）評価はA・B・C・Dの配点通りです。平常点は日頃のレポートを可としてみました。（5）テスト内容や評価方法の説明をし、機会あるごとに、目的を意識した話をしました。

63—（1）文法は過去表現（複合過去）の学習、話すことへの抵抗を少なくする。（2）採用テキスト（条件法、接続法を含む）の半ばまでで、過去表現まで達せず。（3）後期（2回の筆記60、3回のオラル30、映画レポート10で計100点）出席は1／3（5回）に達すると警告。（4）ABCDは平均点を考慮した上で決定、大学基準に従う。Dは学習の形跡が見られない答案など、著しく平均より乖離した者。

「中国語」

64—（5）ペーパーテストの素点の扱い。後期2回のテストの平均を評価の基準とする。レポート等の課題はプラス評価を用いる。出席はするが前提である。

「スポーツ」

65—（1）①バトミントンの技術について：ロングサービスやショートサーブを使い分けられる。サーブレシーブやレシーバーに対してフォローができる。球種の強弱やコースが打ち分けられる。

ペアとポジションについて協力できている。②意欲・態度について：積極的に練習に取り組む、公平に練習の機会をとる。得点係や選手の役割分担を行い、試合を運営し、参加する。出席について：10回以上の出席をする。（2）①バトミントンの技術について：サーブの重要性がまだ十分理解されていない。したがって、レシーブ、レシーブリターンが甘い。球種の強弱やコースの打ち分けはよくできている。技術レベルを配慮してペアを組み、同じペアでもう少し時間が必要であった。②意欲・態度について：評価の難しい点である。また、こちらの指導法によっても、取り組む意欲が変わるだろう。何が目当てで如何にするのか、具体的に理解してもらいたかったが、学生の関心を引き付ける方法に工夫が足りなかった。③出席について：3名が6回以上欠席をした。（3）技能については、最後の2回に実施したダブルスゲームの試合状況を、上記4つの項目について、主観的に観察し記録した。それを基にそれまでの試合結果等を参考にしながら、技能について評価した。意欲・態度については、全く練習に取り組まない日が数度みられた学生を除いて、全く差がない。ここから遅刻や早退の減点を行った。（4）100点満点で、出席点を60点（欠席1回につき－5点）、技能点を20点、意欲・態度点を20点（遅刻1回につき－2点）とした。普通に取り組んでいれば、意欲・態度点15点、技能点は14～16点とした。もし、6回欠席すると出席点は30点となり、合否のラインになる。5回の欠席であっても（35点）、普通に取り組んでいれば（30点）、総合で65点となり、技能レベルが劣っていてもなかなか60点を切ることはない。今回技能点は12～18点の範囲であった。

66—（1）ある程度の技術の取得。（2）到達したと思う。（3）レポート、出席。（4）出席については点数化、1回につき－4点、遅刻－1点／回（大きな遅刻は例外）。レポートについてはA・B・C、　テーマにあっていないC、内容の充実度でA・B。

67—（1）実技科目であるから、出席は絶対条件として2／3以上必要。授業の取り組みへの意欲・態度（ゲームの勝敗や記録の取り方などを加味して、総合的に評価する）。（2）（1）に同様。（3）①出席点、②記録・報告用紙採点、③自己評価点を参照。（4）出席2／3以下はD、出席2／3以上の者について、（3）①②③を総合して80点以上をA、70点以上80以下B、70点以下Cとした。

68—（5）シラバスに書いた評価方法をもう一度読み上げた。

69—（1）体力に関する知識、実践能力の育成。（2）やや達成できた。（3）出席とレポート。（4）欠席回数による減点法とレポートの提出。

70—（1）受講生が授業中に一定以上の運動量を消化すること。受講生全員がけがなくサッカーを楽しめること。（2）各授業毎にウォーミングアップの時間を除いて正味50分以上ゲームを行うことができ、若干名を除くと、運動量は充分であった。（3）出席状況と授業中の態度を特に運動量に注目し判断した。（4）各自体力差があるため、それぞれの授業終了後にバテルほど動き回っている場合をA、参加はしていたがほとんど動かずプレーにもあまりかかわっていない場合をCと判断した。これに加えて、実技科目であり、出席状況を考慮した。

付録3　依頼文と調査票

平成13年1月31日

平成12年度共通科目後期担当

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

共通科目の成績評価に係る調査のお願い

共通科目委員会委員長　石黒宣俊

本年度前期の共通科目の授業担当、ご苦労様でした。また、学期の最終段階（7月）にお願いした「共通科目の授業改善のための調査」(調査対象は受講学生と担当教員）にご協力して頂き、ありがとうございます。調査授業数131件、回収数107件で回収率は82％でした。現在、当委員会の専門委員会を中心に集計・分析中てす。その結果がまとまり次第ご報告する予定です。

さて、共通科目の授業改善を目的として、引き続き「成績評価に係る調査」を実施することとしました(第4回教育学部教授会報告第2号「平成12年度『共通科目の授業改善のための調査』の実施に関する要項」(12.6.28))。担当の先生方に貴重な時間を再度割いて頂くのは大変心苦しいことではありますが、ご協力をお願い致します。

1.　共通科目の成績評価に係る調査のねらい

成績評価に関しては、本学の教育課程実施要領に基準等が設けられています(参考資料参照)。しかし、この基準をどのような方法で具体化するかは各担当教員の責任であります。

ご承知の通り、本学の共通科目の授業は、初学年開設が多く大学教育において極めて重要な位置にあります。授業の内容や方法のみならず、(1)「成績評価はどうあるべきか」ということは、各々の授業において学生に何を獲得させるかという目標を具体的に明確にすることとも深く関わり、授業改善として取り組む必要があると思われます。

また、成績評価に関して、学生にとっても教員にとっても何の疑問も生じていないというわけではありません。例えば、(2）共通科目の授業（学生側に選択権のない、クラス指定が大半でもある）で、成績評価の結果に疑問を感じている学生（卒業生を含めて）がいます。一方、(3）成績評価をどうすべきか毎回悩み改善を図りたいと思っている教員もいます。

以上の3点〔(1)(2)(3)〕を念頭に、どのような基準（判定要素、方法とその荷重など）で実際に成績評価が出されたのか、その実情把握に重点を置いた調査を行うこととしました。

2.　調査対象者及び調査時期について

（省略）

○成績評価に係る参考資料（本学教授会で審議・決定し、学生に提示しているものです。)

「愛知教育大学教育学部教育課程に関する規程」(平成12年度「履修の手引」175ページ)

第３章　単位及び授業

（単位の授与）

第26条　単位の授与は、授業科目を履修した者に対し、試験の上行う。

「愛知教育大学教育学部教育課程実施要領」(平成12年度「履修の手引」187ページ)

1　通則

（試験）

第11　規程第26条にいう試験は、次の各号に定める方法によるものとする。

（１）筆記試験　（２）口述試験　（３）報告書審査　（４）作品及び実技審査

2　試験は、期日を定めて実施する定期試験及び適宜実施する臨時試験とする。

3　受験資格は、原則として１つの授業科目について10回以上（集中講義は該当授業科目にに授業時間の３分に２以上）の出席を必要とする。ただし、臨時試験の受験資格は特に定めない。

4　試験成績の評価は、A、B、C 及び D の評語により判定し、C 以上は合格とし、D は不合格とする。

5　評価の基準は、100点満点の場合、次の各号に定めるとおりとする。

（１）A　85点以上

（２）B　70点以上85点未満

（３）C　60点以上70点未満

（４）D　60点未満（不合格）

「共通科目の成績評価に係る調査」(調査票)

成績評価は実施した授業と切り離すことは不可能です。この調査の集計結果等を公表する際には、一切個人名が特定できないよう配慮しますので、記述は出来るだけ具体的にお願いします。提出締め切りは3月12日（月）です。

1. あなたが平成12年度前期に担当した授業は次のどれですか。該当する番号を○で囲んで下さい。
(1)日本国憲法　(2−1)人文科学入門　(2−2)社会科学入門　(2−3)自然科学入門
(3−1)平和と人権　(3−2)環境と人間　(3−3)こころとからだ　(3−4)現代日本の社会と文化
(3−5)国際社会と日本　(3−6)科学･技術と人間　(3−7)人間と生活　(4−1)情報教育入門Ⅰ
(4−2)情報教育入門Ⅱ　(5−1)英語Ⅰ～Ⅳ　(5−2)英語コミュニケーション　(5−3)ドイツ語
(5−4)フランス語　(5−5)中国語　(5−6)朝鮮語　(6)スポーツ科目

2. あなたの授業で設定した（1）到達目標（あるいは重視事項）と実際の（2）到達度、実施した（3）評価の方法と（4）評価基準（点数化又はA・B・C、及び特にDにおける評価ポイント）を、実施した授業に則して具体的に記述して下さい。(余白が不足する場合は､別紙にご記入の上添付して下さい。)
(スペース省略)

3. あなたは成績評価（A・B・C・D）は何のために行うと考えていますか。(複数回答可)
（1）評価は有害と思っている
（2）義務的に行っている
（3）大学（愛知教育大学）としての教育の「質」を維持・向上させるため
（4）個々の授業は、大学教育全体のカリキュラムの目的・位置づけに従い、目標・内容・方法を持って行われ、成績評価で一つの授業の役割を完成させるため
（5）学生の学習（学修）成果を到達度で知らせるため
（6）学生の学習（学修）の援助をするため
（7）自分の授業を評価し問題点等を把握するため
（8）その他（その他を選択した方は、以下にその内容を記述して下さい。)
(スペース省略)

4. あなたの「評価方法・基準」について、受講生に詳しく説明する必要があると思いますか。
（1）必要ない
（2）授業を始めてみないと、受講生の学習（学修）能力の水準が分からないので示し難い
（3）可能な限り説明すべき
（4）説明する必要がある。さらに、解答例や実施した評価ポイントを公開すべきだ
（5）その他（その他を選択した方は、以下にその内容を記述して下さい)
(スペース省略)

5. 受講生に「評価方法・基準」を授業目標に沿って具体化して示しましたか。

（1）シラバスでも授業中にも、具体的には説明しなかった

（2）シラバスで具体的に示したので、授業中に説明しなかった

（3）シラバスでは不十分なので、授業中に具体的に示した

（4）シラバスで具体的に示し、授業中にも説明した

6－1. 5の質問に対して（3）と（4）を選んだ方だけ答えて下さい。「評価方法・基準」を示した時期は次のどれですか。

（1）学期の初め頃　（2）学期の中頃

（3）学期の終り頃　（4）定期試験の直前

6－2 5の質問に対して（2）（3）（4）を選んだ方だけ答えて下さい。「具体的に示した内容」をなるべく詳しく記述して下さい。

（スペース省略）

7. あなたは次のどれによって成績評価をしましたか。（複数回答可）

（1）筆記試験

（2）口述試験

（3）報告書審査

（4）作品及び実技審査

（5）その他（その他を選択した方は、以下にその内容を記述して下さい。）

（スペース省略）

8. 成績評価に出席状況を加味しましたか。

（1）加味しなかった

（2）少し加味した

（3）かなり加味した

（4）強く加味した

9. 成績評価は厳正に行い、ある基準に達しない者は不合格にすべきであると思いますか。

（1）全くそう思わない

（2）そう思わない

（3）どちらともいえない

（4）そう思う

（5）強く思う

10.　成績評価はどのような方法でしましたか。

（1）最低限の目標を設定し、そこまで到達した者を合格とし、その到達度によりA・B・Cを決める（絶対評価）

（2）最低限の目標を設定し、そこまで到達した者を合格とし、合格者を一定の割合でA・B・Cに割り振る（絶対評価と相対評価の組み合わせ）

（3）その他（その他を選択した方は、以下にその内容を記述して下さい。）

（スペース省略）

11.　学期の途中で臨時試験・課題（報告書の提出等）を課し、学生の学習の進捗状況を評価（形成評価）しながら授業を行いましたか。

（1）行わなかった

（2）行った　（行った回数　　回）

12.　成績評価に係る試験（筆記試験、口述試験、報告書審査、作品及び実技審査）の採点結果（コメント・添削も含む）を受講生に返却（通知）しましたか。

（1）行わなかった

（2）行わなかったが、試験の回答例を公開した、又は実施した評価ポイントを公開した

（3）行った

（4）行った。さらに、試験の解答例を公開した、又は実施した評価ポイントを公開した

その他、ご意見等がありましたら、以下にその内容を記述して下さい。

（スペース省略）

13.　自分の成績評価は甘いと思いますか。

（1）全くそう思わない

（2）そう思わない

（3）どちらともいえない

（4）そう思う

（5）強く思う

14.　成績評価に関して、困難を感じたことがありますか。もしありましたらどのようなことか記述して下さい。

（例、試験の採点の結果が非常に悪く、設定していた評価基準の使用が困難となり、評価基準が大きく揺らいでしまった。）

（スペース省略）

15.　この調査に対する、ご意見・ご感想があれば以下にお書き下さい。

（スペース省略）

（ご協力、ありがとうございました）